

インターネット言語の言語民俗学的価値の探索研究

高瑞研(中央大学校)

1. 序論

言語の研究範囲は国文学、人文学、民俗学など多様な分野の領域において扱われている。国文学の領域では言語の全体的な部分を分析し、民俗学の領域においては言語を通じてヒトの暮らしが研究される。そして言語民俗学では主に記録の有無を中心に、記録が存在するジャンル(文学、民俗劇)がメインに研究されてきた。そのため記録が存在しない研究は進んでいないことが多かった。

記録が存在しない代表的な例が談話研究である。談話にはその地域の生活文化、歴史などが含まれている。近代、資料収集が容易ではなかったため研究が進まなかったが通信技術が発達し、研究が再び進められた。ただ近代や現代の主たる研究対象は主に‘地方’というポイントに限定的である。研究の対象が限定的な理由は、その地方だけの言語的な特色が明確に表れる方言などが現代に入り全国的に人口移動が活性化し、その地方だけの言語的な特色が徐々に減少してきたからである。地方だけの方言、即ち過去を知り得る方言、訛り、俗信語などの言語が消失する可能性が大きくなりつつあり言語を残さねばという目的が強化されたためと思われる。現在の方言研究には既に進められてきた先行研究が多く存在している。しかし、これからは既存の言語を保存することも重要であるが限られた主題から離れ新しいネイティブの研究も必要であろう。

1990年代よりインターネットの常用化に伴い新しい文化が創造され、新しい言語体系も生成された。インターネット言語の生成と伝播速度は非常に早く、仮想世界を超え現実世界でも大きな影響を与えている。言語民俗学における現代言語研究の進捗が遅い状況の中、現代言語を研究し新しいネイティブ研究の価値を探索する必要があると思われる。本稿ではこれらの提議を解決するため現代の言語に大きな影響を与えている‘インターネット言語’を研究対象とし、生成主体である‘ミーム’を調査する。ミームの一種である‘オバケ語’、‘野民正音’‘給食体’を例として挙げた。最後に現代インターネット・ミームが言語民俗学における価値が何であるかについて提示しようと思う。

2. インターネット・ミームの定義

ミームとは、1976年にリチャード・ドーキンスによって導入された用語であり『利己的な遺伝子』で初めて使用された。ミームの定義は遺伝子が生物学的情報を複製し、後世に伝えるプロセスがあるように、文化的要素にも遺伝子のように模倣を通じ伝わる現象とされる。¹

¹ リチャード・ドーキンス『利己的な遺伝子』、2006、pp、330~349.

現代のミームは特定の文化形成を模倣し新しい文化形成を作り出すプロセス、そして早く広く伝播するという特徴がある。このようなミームがインターネットに触れることで‘インターネット・ミーム’という位置を獲得し、インターネットという空間の特性上、誰もが参加し楽しめる1つの遊びとなった。インターネットで文化アイデアや行動、スタイル、映像などの多様な分野においてインスピレーションを受けた多くのユーザーが創造性を持ちミームを制作、そしてイメージまたは映像、歌など多様な形に変え、多くのプラットフォームを経て全国的に拡散したのだ。²

2.1 インターネット・ミームの生成と伝播

1999年大衆にインターネットが普及し、2000年代の初めネイバー(naver)やダウム(daum)のような大規模なポータルサイトが登場した。これらのサイト内ではコミュニティルームという小さなページが開設された。インターネットコミュニティは共通の関心事[ゲーム、音楽、芸能人、アート、車、政治など]を持つ人々のオンライン上の集まりの場となり、そこに所属した人々は掲示板を通じ自由に他のユーザー達とやり取りした。

インターネット・ミームが生成された契機はコミュニティサイトであるDCインサイドの運営方針にある。DCインサイドの設立当初はカメラ、ITの関心事を持つ人々で構成されるコミュニティだった。コミュニティでコメントを投稿しようとする時、ギャラリーパートでコメントとともに写真をアップしなければならず、万が一この投稿に関する運営方針に従わなかった場合には強制削除された。

大多数のDCインサイドのユーザーたちはこのような強制削除について‘削除される’という用語を創り出し‘削除(チャルリム)防止(バンジ)’するため作成したコメント本文とは全く関連のない写真をアップした。この写真のことを‘削除禁止(チャルバン)’と言った。以降ユーザーが‘チャルバン’を作ることを遊びにして面白く、興味を惹くような写真がいろいろ使われながら大衆的に流行し始めた。‘チャルバン’を通じ多数の利用者が参加し、生成され伝播したことが初期のインターネット・ミームの発生であり、以降創作ミームの基礎となった。

インターネット・ミームの起こりが‘チャルバン’だったので主にミームはテキストや、イメージを中心にその文化が形成された。社会的な問題に対する風刺、流行語、政治家や社会、芸能人など多様な範囲から主題が選ばれ、原本を基に模倣し、引用するなど多様な方法で再構成し創作された。

2010年以降ユーチューブを始め、映像を制作し流通させることが可能な多様なプラットフォームが導入された。既存のテキストイメージを中心とするものから音楽や映像を制作、また国内だけでなく海外の様々なミームも使用され映像や動く短編イメージが制作されるなどミーム制作にも大きな変化が起きた。

3. インターネット言語・ミームの伝承と創作

² パク・グァンギル、「インターネット・ミームの言語的性格の考察」、『人文科学研究 第66集』、2020、p. 8.

インターネット・ミームが無限に使われるというわけではない。ある瞬間、大衆的に使われなくなると効力を失う。それを‘死んだミーム’という。死んだミームはインターネット上から消えず記録に残る。時が流れ再びそのミームが流行に乗り使われることを‘再生ミーム’という。‘再生ミーム’はインターネットで生成されるだけでなく、インターネットが存在しなかった時代の‘死んだミーム’も再生される。多くの人がそれぞれの経験を基にインターネットに記録を残し、伝送するからである。

3.1 インターネットを通して伝承するオバケ語

実際に‘死んだミーム’がインターネットを通じ復活し‘再生ミーム’と言われる代表例にはオバケ(クィシン)語がある。オバケ語の初出現は明らかではないが、少なくとも1970年代より以前に発生した1つのミームである。³オバケ語の構成は単語の間に‘ㅁ’や‘ㅂ’を挟み文章を作る。この子音を挟む理由は他人が聞くととても不自然に感じるからである。

オバケ語を大きくA、Bに分類すると、単語の配列は次のようになる。パッチムがない場合も同様に‘ㅁ’や‘ㅂ’を挟む。大衆的にBタイプが多く使われている。

Aタイプはパッチムをそのまま動かさず単語の間に‘ㅁ’や‘ㅂ’を挟む

- 안녕하세요: 안반녕병하바세베요보 (「おはようございます」などの挨拶の意)

- 김밥천국: 김삼밥삼천선국숙 (「のりまき天国」の意、店名)

Bタイプは文字単位で使用され母音で終わる時は子音1つを後ろに挟む

-안녕하세요: 아반녀병하바세베요보 (「おはようございます」などの挨拶の意)

-김밥천국: 기삼바삼처선구숙 (「のりまき天国」の意、店名)

またオバケ語は地域や、構成によって挿入される母音が違う場合がある。その代表として(江原道江陵市)の一部地域では単語の間に-나사를挿入し文章を作った。

대한민국= 대나사하나산미나산국 (「大韓民国」の意、国名)

학교= 하나학교 (「学校」の意)

オバケ語の主たる使用年齢層は7歳から始まり10代半ばまでであり、そして使われる期間は学期がスタートする頃から学期半ばまでである。普通、近い歳の集団だけの秘密言語としての目的に使われる場合がほとんどである。⁴

3.2 インターネットの創作言語・ミーム

インターネットのコミュニティではそのコミュニティ内で仲間うちだけの言語を作り使用される。このような言語が他のコミュニティに拡散しながら大衆にミームとして伝播していった。2010年から

³ キム・ジュグァン、「オバケ語または韓国語のピッグ・ラテン」、『比較文化研究 第17集1号』、2011、P16

⁴ キム・ジュグァン、「オバケ語または韓国語のピッグ・ラテン」、『比較文化研究 第17集1号』、2011、P18

多くのコミュニティ、放送などで大量の新造語が誕生し、その中でも‘野民正音’や‘給食体’は韓国の言語に非常に大きな影響を与えており今もなお使用されているインターネット言語・ミームである。

‘野民正音’は2014年にDCインサイド内の野球ギャラリーで生成されたミームである。語源の意味は野球ギャラリー + 訓民正音の合成語である。初期の野民正音は一部のコミュニティでのみ閉鎖的に使われていたのだが次第に放送を通じ全国へと流行しミームとして認識された。⁵

野民正音は文字の解体を基本とし、他の文字との組み合わせ、変形、挿入を通じ新しい単語を創り出す。

例示 1. ハングルの子音と母音のコラージュ型-[명명이-댕댕이], [대한민국-머한민국]

例示 2. ハングルの音節全体を漢字で表現-[짜-卒], [金長훈-슌튼훈], [짜라면-푸라면]

例示 3. ハングルの子音、母音を数字で表現-[ㅇㄷㅇㅇ-0720]

例示 4. 単語を回転させる-[비버-뜨뜨], [눈물-룸곡]

例示 5. 文字の圧縮 元の文字と視覚的に類似するものに変える-[부부의 세계-뽕의 세계], [조조-쪼]

‘給食体’の始まりは2009年にインターネット放送サイトであるアフリカTVでBJが流行語を作り拡散したことが契機となり始まった。給食体の語源は給食を食べる10代を卑下する単語である「給食を食う子供(クプシギ)」と文法の「体」を組み合わせた単語である。給食体は野民正音と同様にいくつかのプラットフォームを経て全国的に流行した。給食体はハングルの子音、母音、単語をあまり変形させない。単語の母音を縮約したり実際に存在する単語の意味を新しく変容させたり、いくつかの単語を組み合わせたり創造するなどして新しい造語を創り出された。

例示 1. 1つの単語を中心に多様な単語を付加し作り出された場合、生成された単語はその状況に合わず意味がないことがほとんどである。

인정? 어 인정: 他人の言葉を認めるという新造語

単語の変形語が存在し、その単語の間の‘어’を中心として前後に単語を分解する

동의? 어 보감[東医宝鑑:「同意する」と「東医」宝鑑の同音異義語から作られた]、

머라이 어 캐리 오징 어 볶음 등이 있다. マライア・キャリー (の) イカ炒めなど(が)ある

例示 2. 単語の羅列を3つ以上繋げ主に相手を挑発する時に使用、感嘆詞として使われる

- ‘어쩔티비’-[「どうしろって言うんだ、テレビを見ろ」の意]+저쩔티비+쿠쿠루뽕뽕

-킹받쥬? 아무것도 못하쥬? 어 또뽕치쥬? [ムカついた? 何もできないでしょ? また怒るの? 方言やインターネットの新造語を合成したもの]

-오지고 지리고 랫잇고: 감탄할 때 사용한다. (「すごい、やばい」の意 : 感嘆する時に使われる)

例示 3. 以前に使われた言葉を再構成、または単純に子音だけを使うなど新しい単語を創造

⁵ 칸·옥미, 「野民正音と給食体の解体主義 表現研究」, 『人文学研究 第56集』2018, p 326

-극혐(極嫌) [極めて嫌悪する]

-찐따[朝鮮戦争で爆撃により足を失った負傷者を卑下する言葉。最近では弱い人という意味として使われる]

-ㅇㅂ, ㄴㅇㅂ, ㄴㅂ, ㅇㅇㄹㅇㅇㅇ [母音で作られた新造語 認める、認めない、面白くない、意味のない感嘆詞]

野民正音や給食体は10代から20代で主に使われるのでその上の世代にはその言語自体が見慣れないものであることが多かった。しかし多様なマスメディアで言語が使われ始めると上の世代も言語を学びながら使用されることが増えてきた。

4. 結論

インターネット・ミームが現代言語に大きな影響を与えているのは流行の拡散スピードが早いからである。流行り出すと放送局やユーチューブなど多様なプラットフォームでも使用され、大衆化され伝播するからである。したがってミームを作ったコミュニティの中でなくとも他のプラットフォームを通じ言葉を学べる環境があるので容易く習えるのだ。

今まで詳しく見てきたインターネット言語・ミームを整理するとインターネットが発達する前に‘ㅂ’や‘ㅅ’を挿入し、言葉を作り出されたオバケ語はその脈絡が一度断たれたがインターネットを通じ再度伝送され大衆的に伝播した。インターネットの中で生成された‘給食体’や‘野民正音’は韓国の現代言語に大きな影響を与え、現在も活発に生成され大衆に広く浸透している。ただ大衆が多く使用しているからといって肯定的であるということではない。本文では大きく扱わなかったが、野民正音や給食体は若干社会的に問題のあるサイトで生成され、意味が良くない言語が多数存在する。また主たる使用年齢層である 10 代、20 代とその上の世代間との疎通断絶問題や、ハングルの深刻な破壊など否定的な意見も存在する。

韓国が過去から現在まで至る過程の中に言語により創作された芸術が常に存在している。今までの言語民俗学の先行研究は言語を失わせるのではなく、言語の中、祖先の暮らしの中に文化、歴史、芸術などを見つけ出した。

現代のインターネット言語には以前に比べ多くの資料が存在するので言語を土台とする特定の年代の文化、習俗、仮想世界の暮らし、芸術など以前より多様な視点から研究が可能である。したがって持続的に新しい言語が生成、使用され、そして今後もより早く変化する現代人の言語文化と暮らしは研究可能で価値が豊富にあるブルーオーシャンだと言える。

参考文献

カン・オクミ、「野民正音と給食体の解体主義 表現研究」、『人文学研究』第56巻、朝鮮大学 人文学研究院、2018.

キム・ジュグァン、「オバケ語または韓国語のピッグ・ラテン(Pig Latin)」、『比較文化研究』17(1)、ソウル大学 比較文化研究所、2011.

パク・グァンギル、「インターネット・ミームの言語的性格の考察」、『人文科学研究』第66集、江原大学 人文

科学研究所、2022.

パク・ファンヨン、「都市民俗研究の方法と領域」、『韓国民俗学』、第54巻、韓国民俗学会、2011.

オ・ヨンジン、「給食体、野民正音を含むサブカルチャー系 言語発生の背景と特性」、『韓国辞典学会学術大会
発表論文集』17(1)、韓国辞典学会、2018.

チョン・ヘスク、「言語民俗研究のための提言」、『歴史民俗学会』第5号、韓国歴史民俗学会、1996.

(翻訳責任者：澤井亮佑)